

## 昭和二十年終戦

有明海陣地にて

我出征の日、泰元謙讓ともに病む

《昭和二十年、榮助は三つ目の赴任校である塩崎国民学校教師であった。時代は小学校の名前まで変えたのである。この間、日米友好の青い目の人形排斥というエピソードがあり、榮助も校長の命により、青い目の人形を燃やした、と言っていたが、この種の兵士の告白は傍証無しでは信ずる事は出来ず、真偽のほどは判らない。

戦争経験者の体験談を真実として一も二も無く信ずる風潮があるが、彼らに悪気は無くとも真実を語っていると限らない。証人の語る事が絶対に真実であるならば、裁判に弁護人だ検事だなどは要らないのである。

昭和二十年六月、榮助は甲府の東部六三部隊に召集される。三十一歳、子持らの老兵であった。東部六三部隊は米軍の九州進攻作戦の際、上陸地点となる事が予想された有明海沿岸防衛の任に就いた。》

## ゆく夏の海へ落月子等ははや

読み〓ゆくなつの うみへらくげつ こらははや

季語〓夏 または ゆく夏(夏)

出征の時の子供達の病気はかなり重かったのであろう、この句は、自分の運命と共に子供達の命を心配しているようである。

米軍の九州進攻作戦〓オリンピック作戦は昭和二十年十一月一日に予定されていたが、八月十五日戦争は終わった。

内地にいたせいもあり、榮助は原爆の惨禍の長崎、広島を経て九月早々に復員する。

九月二日復員、九日二男謙讓逝く一歳六ヶ月

## おくつきにしたる星座秋隣る

読み〓おくつきに したたるせいざ あきとなる

季語〓秋(秋)

おくつき〓奥津城は、仏教ではある特別な領域にある墓、の意味。

復員七日後に次男謙讓の死に遭う。謙讓は父を待つて株立って行ったよである。親にとって子の墓というのは特別な場所であろう。その墓の上に秋の星空。秋の星空というのは明るい星や著名の星座が少なく、割合に淋しいのであるが、それは天体観測に興味がない黙榮の考察には入っていないであろう。

敗戦、復員、子の死、という激動の中、感慨深い秋であったであろう。

## 秋海棠咲けば偲ばる子となりし

読み〓しゅうかいどう さけばしのばる ことなりし

季語〓秋海棠(秋)

前の句に比べると一段調子を下げた句である。万葉集にある長歌・反歌の関係を意識しているのかもしれない。

九月初旬なら秋海棠は咲き初めである。庭の木犀の木の下あたりに秋海棠の群落があった。



榮助次男謙讓

アルバムに黒枠付きで貼ってある写真。

真。

支えているのは祖母はつと思われ

が、先の出前の写真とは別の日の撮

影のようである。

節季やお盆の謙讓への陰膳は私が物

ごころついてからも続けられた。

黙栄の対になった葬送の句、その二である。

『おくつきにした、る星座秋隣る』

『秋海棠咲けば偲ぼる子となりし』

## 農被れ雨の昼餉の田螺汁

読みⅡのうづかれ あめのひるげの たにしじる

季語Ⅱ田螺(秋)

田螺は歳時記では春季であるが黙栄は敢えて秋季として使っている。実際に黙栄の生活の中で田螺汁は断固として秋のものである。

甲州方言では田螺は『つぼⅡつにアクセント』である。次の句のように、稲刈りの終わった田んぼでつぼを掘るのは子共の重要な仕事であった。田植えや草取りの時に付いた足跡の指や踵を狙って竹べらや棒きれで掘る。小さなバケツ一杯も掘ったつぼは良く洗い、清水で泥を吐かせた後味噌汁にする。出汁としてのみならず、巻貝の実も楊枝で掘り出して食べる。九

十九里の海で採れるナガラミに似ているが、より濃厚でちよつとぬらつとする野趣のある味である。

## 田螺掘る童に八ヶ岳全貌を

読みⅡたにしほる こにやつがたけ ぜんぼうを

季語Ⅱ田螺(秋)

この句は左の句に訂正戦を引く事無しに脇に書かれていた。つまり、どつちにするか悩んだままであったようである。

『田螺掘る童に八ヶ岳曇りなし』



この句の童は泰元であるが、写真は良知の「つぼとり姿」、バケツと木の棒である。つぼとりは一番小さい子の担当で、成長に伴い、複雑かつ力が要る仕事に移っていく。昭和二十八年頃、山本田んぼに下る小道。

榮助は、内折れ帽子に脚絆巻と凜凜しい。

榮助は若い時から坊主刈りであった。その為帽子を愛用した。坊主刈りの理由はかなり強い天然パーマにあった、という説があるが定かでない。

脚絆Ⅱゲートルは軍隊仕込みであろう。かなり時代が下がっても巻いていた。

## あまばれの風吹き十寒月澄めり

読み〓あまばれの かぜふきじつかん つきすめり

季語〓月(秋)

十寒は論語の一暴十寒(一日温め十日冷やす)からであろう。あまばれの、とあるので雨上がりの良い天気と思われるが、あまばれの風吹き十寒、と受けているので、秋の雨上がりの暖かい好天も束の間、風が吹いてまた寒くなり、月も澄んで見える、と解釈するのが妥当か。

と、ここに十寒は論語から、などとさりげなく書いているが、実はこの解説編を書くには、図書館通い含めて随分と調べての末なのである。

古典が好きだった榮助は、普段の会話でも聞いた事も無い言葉を使い、機嫌が良ければ解説してくれたが、酔った時などはそれを聞き返すと「ほんな事も知らんだか、つまらん本ばかり読んでて古典を読まんからだ」と罵倒された。

日本史では南北朝が好きで、後醍醐天皇に就いて語り始めたりしたら止まらなかった。但し話を合わせるには『増鏡』くらい読んでないと駄目で、いい加減に合わせているとたちまち鍍金を剥がされ、「三鏡くれえ読め」ということになる。

榮助は私には、文学部に進んで日本文学研究の道に進んで欲しかった。それでなければ趣味で良いから自分と対等に語れるくらいになって欲しい、といういらだちがあったようである。

私は工学部で化学を専攻したが、それらの教科書や参考書も、榮助の機嫌によってはつまらん本として罵倒される対象になった。

## 秋耕や八ヶ岳風雲をまといたつ

読み〓しゅうこうや やつふううんを まといたつ

季語〓秋耕(秋)

藤井田圃からの晩秋の八ヶ岳。

白いのが主峰の赤岳

八ヶ岳は独立峰で雲が出やすい。

特に西高東低の冬型の気圧配置になると頂上を覆う雲にまといつかれる。そうなると、八ヶ岳風という冷たい北風が藤井田んぼを駆け下ることになる。

八ヶ岳風が吹くと野良仕事は寒くつらいので、八ヶ岳に雲が懸るかどうかは、秋から冬の百姓の重大関心事である。

この写真は二〇〇九年頃の撮影、右端に新設の北東小学校が映っている。

悪口の人、榮助はこの学校の天文台まである立派な校舎の事を「金の鳥籠に雀を入れてるようだ」と評した。



## 麦蒔きの飼葉をきざむ楯明り

読み||むぎまきの かいばをきざむ ほたあかり

季語||麦蒔き(冬)

楯||はた、囲炉裏や竈にくべる焚き木の事。楯明りはその火の灯りの事。

早朝の風景であろう。外の竈の火を灯りとして麦蒔きの畝立ての主役である牛(馬ではなかった)の朝食の準備をしている。

栢(くぬぎ)の古い株(台木||でえぎ)から出た十五年位の若い幹を根元から切つて切り整え、割つて薪とし、販売と自家用の両方に使つていたが、その薪を作るに当たつては大量の小枝が出る。この小枝をボヤと称し、囲炉裏や竈の焚き付けや竈の一次的火力増強に使つた。他にも剪定で落とした果樹の枝、大量に出る蚕に与えた後の桑の枝、田んぼや畑周りにある灌木など当時の農家では、竈や焚火で燃やすものには事欠かなかった。また、朝に晩に昼に、事があつても無くても兎に角火を燃やした。

秋祭(十一月二十三日) 青年がお紺屋(篤君宅)にて

芸人を招く、その宿をたのまれて

《青年が招く、とは村の青年団主催で呼んだ、の意味。お紺屋、とは村の辻の角にある大きな家で、その名の通り染物屋をやつていたのかもしれない。家の中に石油発動機と脱穀機を据えて作業できる、と言われた位大きな家であつた。その家を劇場代りに旅の芸人を呼んで芝居である。》

## 芸人を泊めて更けり秋祭

読み||げいにんを とめてふけり あきまつり

季語||秋祭り(秋)

旅館など無い田舎の村なので、芸人は村の主だった(スペースに余裕が

ありそうな)家に分散して泊まつたのである。

## 芸人に夜食の膳を運びけり

読み||げいにんに やしよくのぜんを はこびけり

季語||夜食(秋)

田舎の人の芸人という普段は全く触れる機会のない人種の人への好奇心丸出しである。

食用油自給計画

## 南にうつる陽低し菜種植う

読み||みんなみに うつるひひくし なたねうう

季語||菜種植う||菜種蒔く(秋)

ハイカラにもキャノーラ油を自給しようというのである。収穫した菜種は新府駅の近くにあつた搾油屋に持つて行つて絞つて貰つた。食用油、砂糖は兎に角貴重品であつた。

ヨーロッパでは、車で五分位走つても途切れないくらい巨大な商用菜の花畑があつたが、ここではあくまで自給用で、畑の畝数条の菜種である。

## 大八ヶ岳の新雪麦蒔了りけり

読み||おほやつの しんせつむぎまき おわりけり

季語||麦蒔き(冬)

新米百姓榮助にとつて、初めての自分の責任下での稲刈り麦蒔きは大事。その麦蒔きが終わったという感慨の中でふと見た八ヶ岳が新雪だつた。

新雪も強い季語であるが動詞が無く新雪がどうしたのか言っていない。麦時きりり、が主題ととりたいたい。

## 稲架を解く冬雲は垂れ光りなし

読みⅡはぎをとく ふゆぐもはたれ ひかりなし

季語Ⅱ稲架(秋)、冬雲(冬)

冬雲が垂れ、押しつぶすように寒々とした風景の中で稲架から稲束を外す作業をしている。と解釈すれば、稲架が季語となる。しかし、冬雲も冬の季語であり、垂れ光りなし、と主語+二つの述語で完結されているので、冬雲を詠んだとも解釈できる。

この句のように季語+動詞の組み合わせが複数あると、句が散漫になる。その言わんとするところ、描こうとしている光景は、非常に良く理解できるのであるが、やはり一つの句は一つの主題の方がインパクトがある。



下地が湿っている山の麓の『山本Ⅱやんもと』たんぼでは刈った稲を干すのに稲架を組んだ。丸太と真竹の竿で組んだ『うし』と称した大きなものである。

乾いたところで脱穀し、稲架は解かれる。そうするともう冬である。田植えが七月、稲刈りは十一月であるので、年によっては脱穀前の稲架に雪が降る事もあった。

## 冬隣る雨肅条と骨休め

読みⅡふゆとなる あめしようじようと ほねやすめ

季語Ⅱ冬隣る(秋)

肅条は風雨が激しい様子。暖気と寒気の交替時期の晩秋は、大気の状態が不安定で、温帯低気圧が発達して、大荒れになったり、地表付近に対して相対的に冷たすぎる寒気が上空に張り出したりして大荒れになる事がある。夏の農繁期と違って、雨が降れば骨休めになる。

## 芥火の朱金美し暮早く

読みⅡあくたびの しゅきんうつくし くれはやく

季語Ⅱ暮早く(秋)

辞書には、芥火とは海人が海の屑藻などを燃やす焚火、とあるが、ここではその辺の櫓を燃やす焚火と見て良い。何か目的があってもなくても兎に角焚火をするのが百姓である。

火の色を金に例えるのは芥川龍之介の『魔術』を思わせる。事実、榮助は悪魔が暖炉の火をすくって床に撒くと金貨に変わって散らばる場面が事のほか好きであった。

## 閑談の焚火のいつか時雨くる

読みⅡかんだんの たきびのいつか しぐれくる

季語Ⅱ焚火、時雨Ⅱともに(冬) 季重ね

『初時雨猿も小蓑をほしげ也／芭蕉』により時雨は典型的な初冬の季語となっている。こういう強い季語がある場合、季重ねがあってもこちらを取るのが普通の解釈である。この句も唯一の動詞「くる」が時雨に続いている。焚火にあたって馬鹿話をしていたらばらっと来たと言っ感じである。時雨という季語が、くるといふ動詞付きで置かれていても焚火に惑わさ

れる。やはり歳時記に季語としてある言葉が複数ある句は難しい。

## 新藁の俵に置きし蜜柑かな

読み〓しんわらの たわらにおきし みかんな

季語〓蜜柑(冬)

新藁は秋の季であるが、新藁の俵であるので新藁を詠んだのではない、従ってこの場合新藁を季語として季重ねとする解釈はない。新米の入った句のような新藁の俵の上に走りの蜜柑が置かれる。

この時代の走りの蜜柑は酸っぱかった。榮助は酸っぱい物が嫌いだった。「震える(ふれーる)くれえ酸い」は酸っぱい物を口に入れた時の口癖だった。

昭和二十年十二月三十一日、かくして敗戦の年暮るる

## アナウンス悪夢とぞいう年暮るる

読み〓あなうんす あくむとぞいう としくるる

季語〓年暮るる(冬)

その場にいた者の句である。外地にいた兵士の大部分はまだ帰還していない。戦争が三か月早く終わったため、榮助は命は長らえたが、我が子を失った。

悪夢の年は終わったが、日本列島と日本国民の悪夢は続く。時事句ははつきりものを言え、という俳句の公式通りの句である、

昭和二十年 終わり